

奈良時代、京内の建物は掘立柱で桧皮葺、板葺、草葺が一般的であったが、寺院や宮殿、役所などは礎石建物で瓦葺だった。中国風の瓦葺の屋根、朱塗りの柱、白壁、緑の連子窓、金色に輝く金具類は最新建築であり、都の象徴でもあった。



単弁軒丸瓦 横井瓦窯
飛鳥時代（7世紀）

我が国へ瓦は百済から伝わった。飛鳥時代の軒瓦は蓮華紋が百済系の単弁（素弁）で、この瓦に組み合わせる軒平瓦はない。



宝相華紋軒丸瓦 古市廃寺
奈良時代末～平安時代初頭
（8世紀末～9世紀初頭）



軒丸瓦・軒平瓦 古市廃寺
奈良時代（8世紀）



花紋棟先飾瓦 平城京左京八条二坊
奈良時代（8世紀）
花紋塼 平城京左京五条一坊
奈良時代（8世紀）

1の花紋棟先飾瓦は、棟の端に取り付けるいわゆる「鬼瓦」であるが、魔除けの鬼神のかわりに唐代に流行した宝相華紋を中心におき、周囲を雲紋、唐草紋で飾る。宝相華紋や唐草紋は国や貴族たちが独占する文様で庶民には無縁の文様であった。

2の塼は花紋で飾った敷瓦で壁面の装飾にも用いられた。



最大の軒平瓦 大安寺旧境内
奈良時代（8世紀）



最小の瓦 平城京右京三条三坊
奈良時代（8世紀）



三彩施釉瓦 平城京左京二条二坊
奈良時代（8世紀）

三彩陶器の釉薬を瓦に施した豪華な屋根瓦。出土数が少なく、屋根の一部に装飾的に用いられたとみられる。



三彩垂木先瓦 大安寺旧境内
奈良時代（8世紀）

大安寺の建物の軒の垂木に取り付けたもので、釉薬で花紋を描く。



大官大寺式軒瓦

大安寺出土軒瓦 大安寺旧境内
飛鳥・奈良・平安時代（7・8・9世紀）

官の大寺、大安寺の軒先を飾った瓦。大安寺の前身である大官大寺のものは、文様も大振りて立体感があり、奈良時代のものは整ってはいるが、力強さに欠く。平安時代初頭とみられる西塔のものとなると文様が退化しているようすがうかがえる。



大安寺式軒瓦



西塔の軒瓦



金銅水煙片 大安寺西塔
奈良時代末～平安時代初頭
（8世紀末～9世紀初頭）

大安寺西塔から出土したもので、全長5m程度に復原できる巨大な水煙の一部。銅製で鍍金しており、七層、高さ約70mの巨塔の塔頂に金色の水煙が輝いたのは奈良時代末になつてからのことであつた。



軒丸瓦・軒平瓦 多聞城跡
室町時代（16世紀）

中世に瓦が葺かれるのは寺院に限られるが、永禄年間（1558～70）、松永久秀によって奈良に築かれた多聞城には瓦葺建物があつたとみられる。以後、城郭にも瓦が用いられるようになり、江戸時代後期には民家にも瓦葺が普及していく。巴紋は水流の渦を文様化したものとされ、中世、近世の軒瓦に好んで用いられた。